せたがやeカレッジ

「魅惑の仏教美術の世界」

～知れば知るほど仏像が見たくなる講座～

第2回　仏像の歴史をたどる

駒澤大学 村松哲文 准教授

1、仏像の歴史

① 飛鳥時代

杏仁形の眼、仰月形の口、
アルカイックスイル（古拙の微笑）
左右対称の衣文、正面鑑賞、静的な造形
止利仏師、止利様式　非止利様式、
中国・南北朝時代の仏像の影響
作例：法隆寺釈迦三尊像（図1、ウキペディアから）など
　　法隆寺百済観音像（図2、ウキペディア）など

図1

図2

② 白鳳時代

童子形（子供のような表情と体形）、まろやかな体形
中国・斉、周、隋時代の影響
作例：夢違観音立像（図3、ウキペディア）など

図3

③ 天平時代

写実表現の完成、自然な姿、動的な造形

中国・唐時代の仏像の影響

作例：東大寺戒壇院四天王立像（図4書き起こし）など

広目天像

図4

④ 平安時代

遣唐使の廃止 仏像が日本化してゆく

前期・・・厳粛で圧倒的、天平の調和や統一はない。
　　翻波式衣文（図5書き起こし）。香木の流行（檀像）。
作例：新薬師寺薬師如来坐像（図6、ウキペディア）など

後期・・・和様化（日本的な仏像が完成）、寄木造が発達。
作例：平等院鳳凰堂阿弥陀如来坐像（図7）

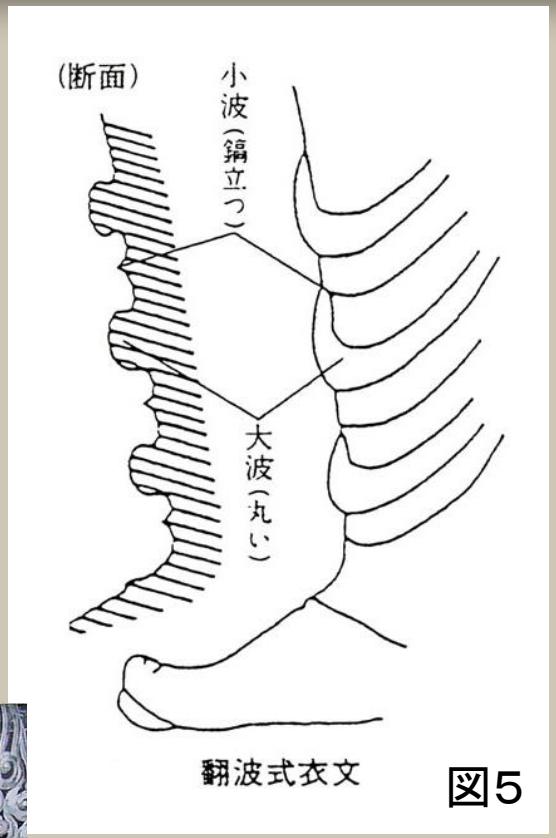


図5

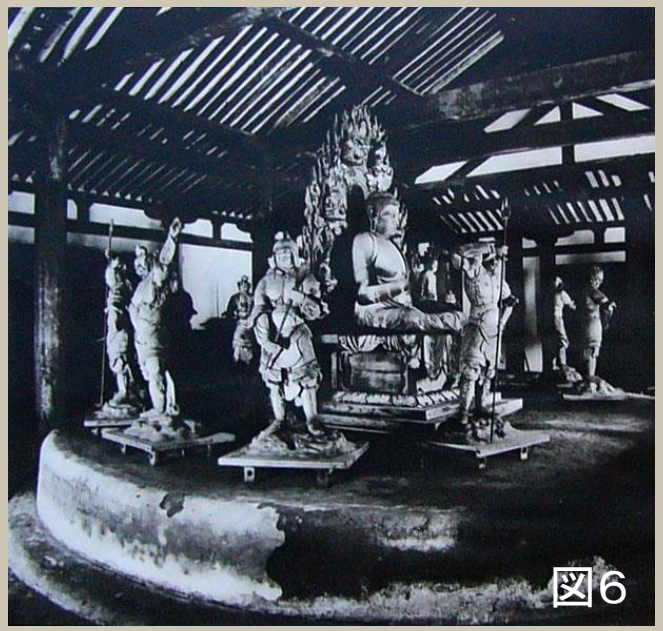


図6

図7

⑤ 鎌倉時代

質実剛健、過度な写実（←天平の復古）、玉眼（図8）。

作例：東大寺南大門仁王像（図9）など

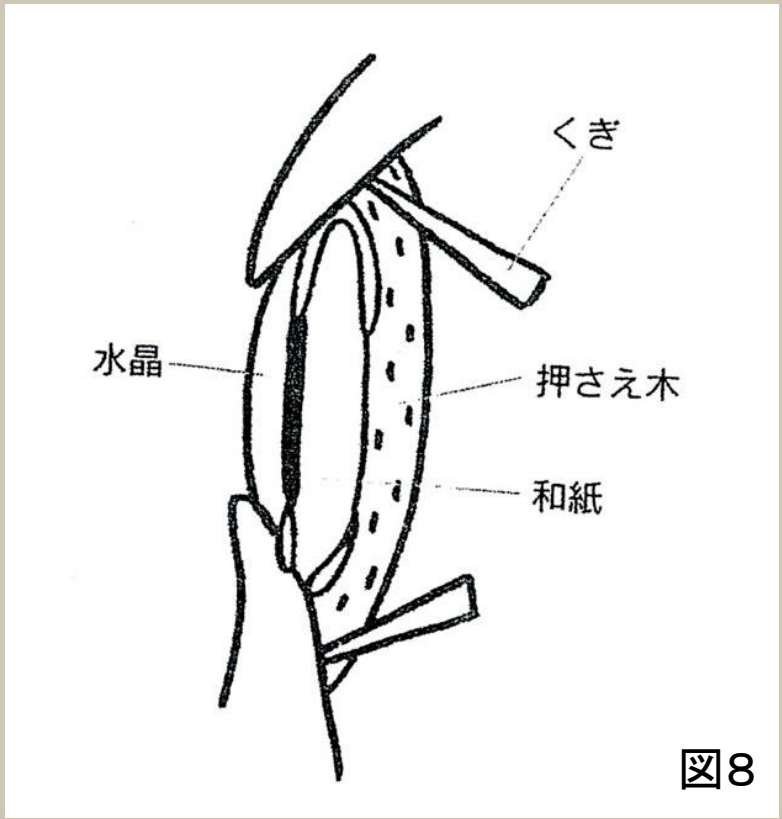


図8

図9

２、仏像の素材

仏像は様々な素材で制作されており、その材質や技法で仏像の特徴をつかむことができる。

①木造

飛鳥時代には樟が一番多く造られ、奈良時代から平安時代にかけて榧が用いられ、奈良時代末からは檜でも制作されるようになる。また中国の影響で白檀などの香木を用いることもある。

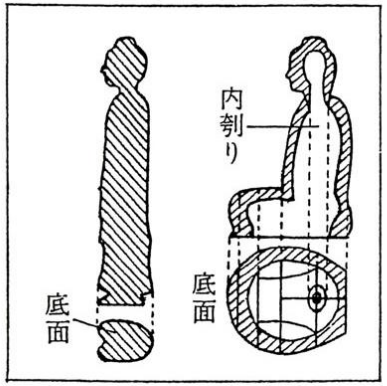
技法的には、一木造と寄木造がある。

☆<u>一木造</u>は、頭部から体部までの主要な部分を一つの用材から造っている。（図10）

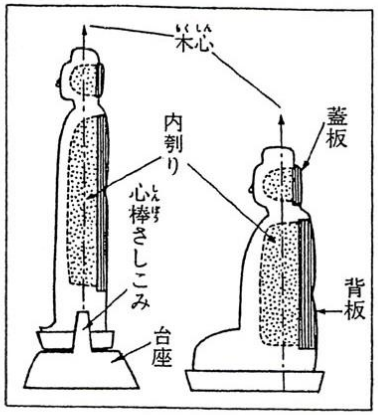
☆<u>寄木造</u>は、二材以上の木材を組み合わせて造っている。（図11）

多くの木造仏像は、内刳といって、像の内部を空洞にしている。→干割れ防止のため。

図10

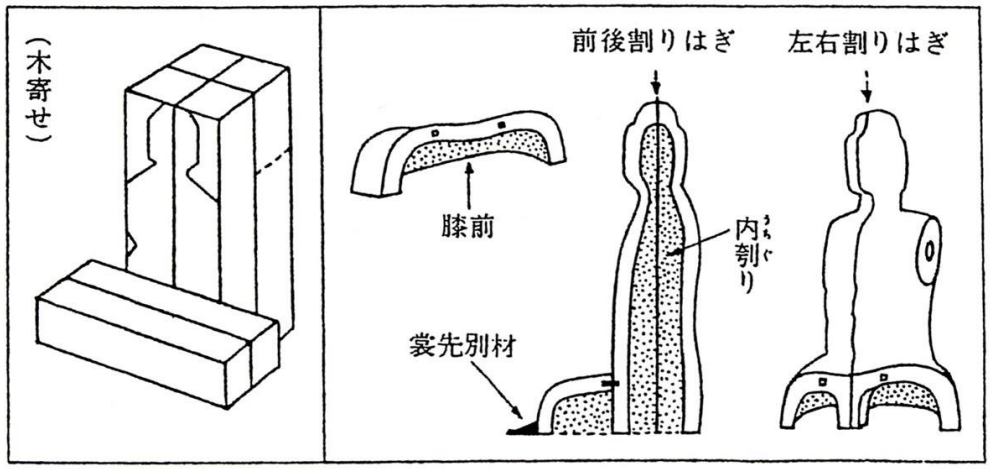


完全な一木造（左）寄木造（右）



平安前期の一木造（本図とは逆に，足枘を台座にさし込む形もある。（「仏像の再発見」より）

図11



寄木造（平等院鳳凰堂阿弥陀如来像）〈「仏像の再発見」などによる〉

② 金銅造：土で大よその仏像を造り、蠟を塗り、さらにこれを覆うように外型を造って、溶解した銅を流し込み固める。
冷やした後に鍍金する。（図12）

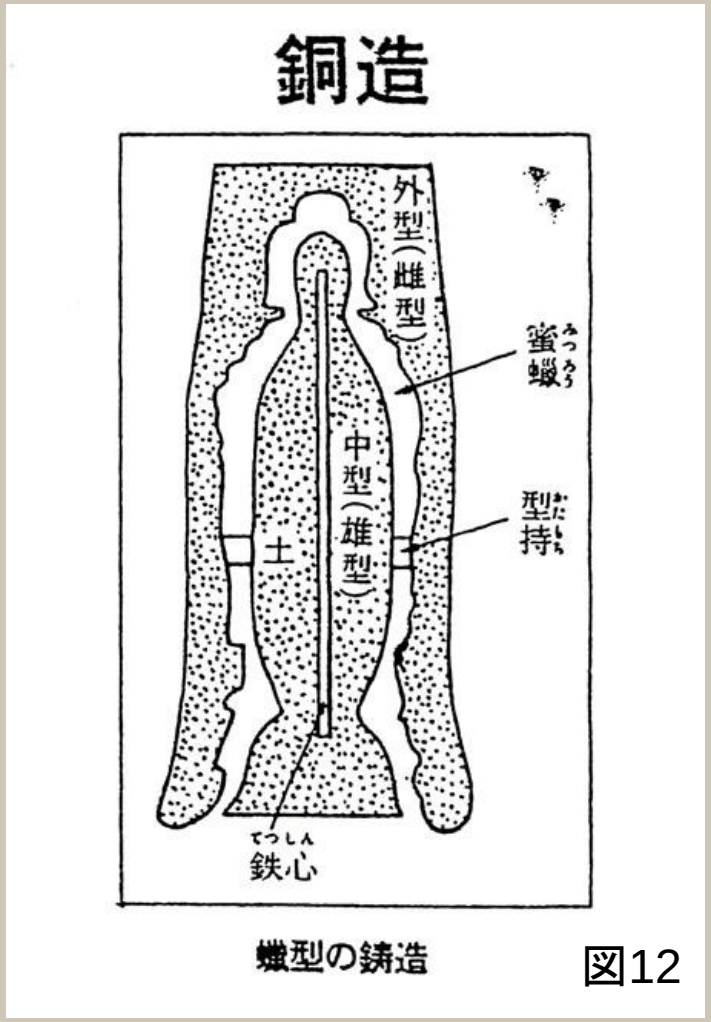


図12

③乾漆造：乾漆造には、脱活乾漆造と木心乾漆仏がある。

☆<u>脱活乾漆造</u>は、木心に粘土をつけて成形し、数枚の麻布を漆で張る。その後背面を切り取り、中の粘土を取り除き、像の補強のために木組みを入れて、背面を縫い合わせる。
最後に表面を乾漆で仕上げる。彩色を施して出来上がる。（図13）

☆<u>木心乾漆造</u>は、木で荒く像を刻みだし、表面に乾漆を盛り仕上げる。（図14）

④ 塑像：木の台に木心を立てて、木心に荒縄を巻く。その上に粘土を盛り成形し、表面に白土を塗ってから彩色を施す。（図15 ）

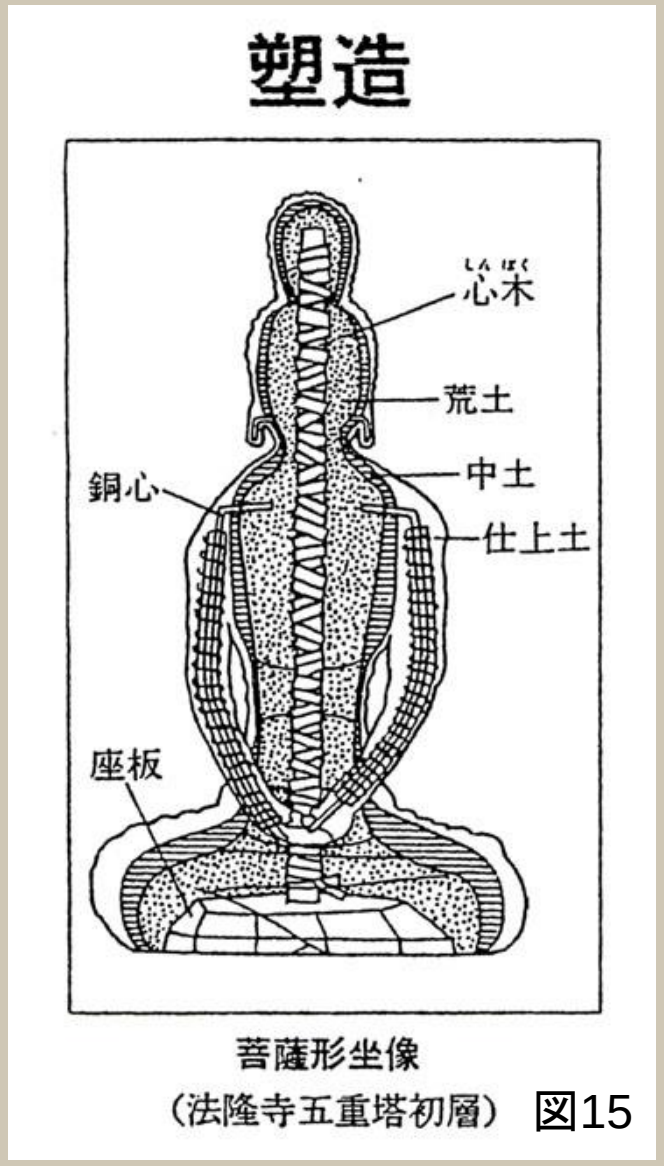


図15